

短期大学の学生調査 2

A Student Survey of Junior Colleges 2

安部 恵美子、小嶋 栄子

1. はじめに —教育の到達目標と学生調査—

1.1 短期大学教育の到達目標の設定・検証の必要性

短期大学は「深く専門の学芸を教授研究し、職業又は實際生活に必要な能力を育成する（学校教育法第108条）」高等教育機関である。短期大学教育の役割について、日本私立短期大学協会は「人間教育を基本にし、職業教育を包含した独自の内容で幅広い教養を備えた21世紀型市民」「創造性と倫理性を備えた真に社会の中心的役割を支える良質で勤勉な社会人」「我が国の人材立国を支える中堅実務者」を育成すること（2009 日本私立短期大学協会「短期大学教育の再構築を目指して」）と定義しているが、短期大学は、教育の到達目標を21世紀の日本や地域を支える中堅層の人材の育成と定めて、その目標達成のために現有の教育の点検・評価から改善のサイクルを確立しなければならない。

各々の短期大学では、ディプロマポリシーやカリキュラムポリシーを検討し教育課程に組み込む作業の中で、教育の到達目標の設定がなされているが、理想やお題目ではない、具体的な到達目標であることが求められている。

従前は、短期大学の教育の到達目標は、各校の建学の精神等の中で謳われている、理想とする人間像など、抽象的なものと捉えられていた。しかしながら、教育の質保証が求められる近年の大学教育改革の波の中で、教育課程（再）編成時の3ポリシー（アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシー）を検討する際には、より具体的・可視的。測定可能な到達目標の設定が求められ、教育課程との整合性や学習成果との関連性について議論されるようになった。

さらに、設定した目標の達成度について多様な視点からの点検が必要である。すなわち学習成果を測定するための方法を確立しなければならないが、その試みは、ようやく緒に就いたばかりで、個々の短期大学、また、短期高等教育機関としての短期大学にとって、設定した到達目標が地域の多様なステークホルダーのニーズに適合しているかどうかについての検証はまだ充分とはいえない状況にある。

教育の到達目標を明確にすることと、その到達度を測定・検証することは、社会に短大の存在意義を示し、ステークホルダーの支持と信頼を獲得するために不可欠であり、われわれ短期大学の教育を担う者はこの課題に対して優先的に取り組まなければならない。

1.2 学生調査とは何か

到達目標を新たに設定する場合や、または設定している到達目標が適切なものかどうかを判断する場合には、検証資料が不可欠であるが、学生調査は、教育成果を検証する資料のひとつである。

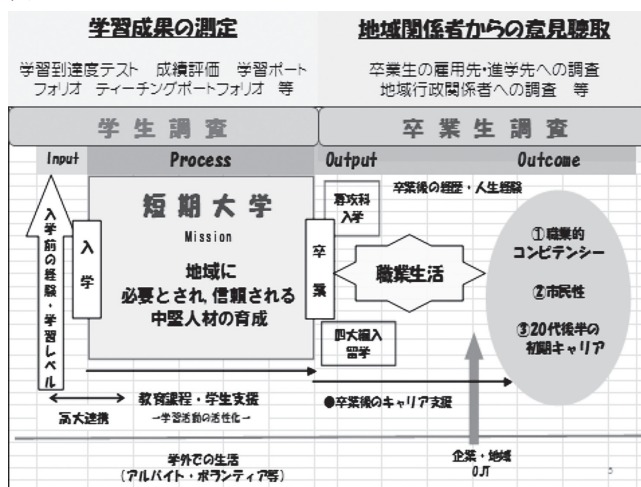
学生調査とは、学習成果 (LO: ラーニングアウトカムズ) 測定のための間接指標といわれているが、学校では学びや生活に関する学生の主観的評価を、質問紙や聞き取りという方法を使って調査するものである。したがって、直接指標といわれる学習到達度テストや成績評価等の客観性の高い学習成果の測定方法とは異なる。

本学生調査は、「学生の入学前から卒業までの学習プロセスと学習モードの特徴の解明のために調査を実施し、短期大学教育の効果の現状を総合的に把握する」「短期大学卒業の最低条件 (ミニマムリクワイアメント) について検討し、短期大学教育が目指す到達目標を定める」ために、「短期大学コンソーシアム九州」に加盟する9つの短大^(注1)に加えて、全国39短大の協力を得て実施した。また、学生調査は、個別短大の教学改善の指標としての活用が期待されるが、コンソーシアム連携の9短大では、自学の教育成果の現状を十分に把握して教育改善を実施すること、さらに、連携校間でも効果の高い教育改善情報を共有することとした。

図1は、短期大学の学びのプロセスと教育の成果を示したものである。今回の学生調査はInputからProcessまでを検証する。すなわち、本調査は、短大入学前の学習・生活経験・入学動機等のInput条件、授業の内容の方法(教育課程)、キャンパス政策(学生支援)、仲間との交流、教員との交流、課外活動、家族やコミュニティとの関係、働くことへの関与などのProcess条件が、学習成果(LO)をどのように規定するのかを明らかにすることを目的としている。

ただし、学生調査には、短大教育に対する学生たちの主観に基づく評価指標という限界がある。短大教育の到達目標設定のための資料としての有効性を高めるには、直接指標である在学中の成績、各種のテスト結果や学習成果物の評価との組み合わせが必要であることはいうまでもない。なお、短期大学の教育成果(Outcome)は、卒業時までのLOの検証に留まらず、成果物である卒業生に対する各種ステークホルダー(卒業生自身も含む)による多面的な評価によって、総合的に検証されなければならないことを付記しておく。

図1



2. 調査の概要

- 1) 調査対象 2009年(平成21年)4月に短期大学に入学した学生
- 2) 調査時期 ①1年次調査 2009年9月～11月 ②卒業時調査 2011年2～3月

表2-1 地域別短大数・学生数

	地域	北海道	東北	関東	東京	中部	大阪	関西	中四国	九州	計
①1年次	短大数	3	3	6	3	9	2	4	1	17	48
	学生数	347	433	1049	239	1133	383	570	313	3392	7859
②卒業時	短大数	3	3	5	3	9	2	3	1	17	46
	学生数	311	377	1015	216	1014	278	380	301	2878	6770

3) 調査方法 ①②ともに、対象短大毎に「質問紙調査」一斉実施・回収
調査対象の地域別の短大数と学生数を表2-1に示した。

3. 入学前の学習・生活経験

3.1 高校時代の学習意欲と高校時代の勉強時間

高校時代の学習意欲を示す指標として、「a: 高校の勉強はおもしろかった」「b: 高校の勉強は将来役に立つと思っていた」

(5:非常にそう思った

1:全くそう思わなかった)「c: 何のために勉強するのかわからなかった」(5:全くそう思わなかった 1:非常にそう思った)の3項目を用いた(表3-1)。

表3-1 高校時代の学習意欲

		全くそう 思わな かった(1)	2	3	4	非常にそ う思った (5)
a: 高校の勉強はおもしろかった	N	400	803	2416	2240	883
	%	5.9	11.9	35.8	33.2	13.1
b: 高校の勉強は将来役に立つと思っていた	N	325	940	2519	1863	1074
	%	4.8	14.0	37.5	27.7	16.0
c: 何のために勉強するのかわからなかった (わかった)	N	329	797	2501	2068	1021
	%	4.9	11.9	37.2	30.8	15.2

さらに、それらの5件評定の加算合計「3~8」を高校学習意欲の低位群、「9~11」を中位群、「12~15」を高位群とした(表3-2)。これによると、高校時代の学習の効用に否定的である低位群は全体の2割以上を占めている。

表3-2 低位・中位・高位群

	低位	中位	高位	計
N	1520	3117	2047	6684
%	22.7	46.6	30.6	100.0

また、これら3群と高校時代の勉強時間の関係を表3-3に示した。全体では、約2割弱が全く勉強をしていないが、その割合は、低位群には約3割、中位群に約1.5割、高位群には約1割と、高校学習の効用に否定的な者ほど、授業以外の勉強を全くしなかった者の割合が高い。逆に、毎日1時間以上勉強する者の割合は、高位群が低位群の2倍程度である。このことから、高校の学習内容への意欲が勉強時間に影響していることがわかった

表3-3 高校時代の学習意欲と勉強時間(週当たり)

	N	平均(h)	全くなかった	0~6時間未満	6~11時間未満	11時間以上
全体	7759	4.0	19.6%	61.8%	9.9%	8.7%
低位	2107	2.9	32.3%	54.3%	7.4%	6.0%
中位	3760	3.9	16.5%	65.6%	9.7%	8.2%
高位	1892	5.2	11.7%	62.5%	13.2%	12.5%

与える可能性を示唆している。

3.2 高校時代の学習意欲と出身高校・短大専攻分野

普通高校出身者は、全体の7割を占めるが、そのうちの27.0%が低位群である。それに対し、専門高校出身者は、全体の2割で、そのうちの半分以上が高位群である。すなわち、普通高校出身者に比べて、専門高校出身者は、高校時代の学習の効用を高く評価している者の割合が高い。その理由はいくつか考えられるが、まず、高校の教育課程の違いがあげられよう。すなわち、進学や受験に関連する国数英理社の科目中心

表3-4 高校学習意欲と出身高校

	普通高校	総合高校	専門高校	その他
	4565 68.1%	619 9.2%	1444 21.5%	80 1.2%
低位	27.0%	18.9%	11.0%	20.0%
中位	50.0%	45.1%	36.5%	42.5%
高位	23.0%	36.0%	52.5%	37.5%

の普通科教育課程と、商業や家政、情報等、実学系の専門科目を配する専門学科教育課程の違いである。前者は、座学によるアカデミックな知識の習得が中心であるが、後者は、実践/実習や職場体験を通じた学習を展開する教育課程である。短大生は、短大入学後も「専門的知識や技術を身につける授業」や「実践(職業)で役立つ実学重視の授業」等を求めているが、高校時においても座学以外の学びに対する親和性が高かったため、専門高校の実学系教育に対する評価が高くなったと推測できる。また高校時の成績との関連もあるだろう。ほとんどの生徒が進学する普通科は、原則として成績で進学先を振り分け、成績に自信のない生徒には短大や専門学校をという選択肢を与える。学ぶ意欲は成績と関連することが多いので、普通科高校で成績に自信のなかった短大進学者の学習意欲は低いと推測できるのである。

専攻分野別では、「人文教養」に高位群が多く、「教育」と「地域総合」に低位群が多い傾向がある。「教育」「地域総合」は、入学者数や全体比率が伸びている分野であるため、今後は、短大全体では、高校学習の効用に否定的な学生の割合が増えることが予測される。(表3-5)

表3-5 高校学習意欲と短大専攻分野

	全体	人文教養	社会	保健	家政	教育	地域総合	その他
N	6684	819	319	173	1433	2257	1297	386
低位	22.7%	18.9%	20.4%	26.6%	21.8%	23.9%	23.8%	24.1%
中位	46.6%	45.1%	48.6%	54.9%	47.0%	46.5%	46.3%	45.1%
高位	30.6%	36.0%	31.0%	18.5%	31.2%	29.6%	29.9%	30.8%

3.3 高校時代の学習意欲と短大進学動機/短大への期待

進学動機については、低位群よりも高位群の方が、「本学に学びたい分野があったから」(57.9%、68.6%)「より教養を身につけることができるから」(11.6%、17.7%)と考えて入学してきた者の割合が高いが、それ以外の動機では大きな差はみられない。

短大への期待については、低位群よりも高位群の方が、「ボランティア活動」(2.47、3.01)「良い先生との出会い」(3.36、3.89)「人としての教養を深めること」(3.68、4.13)「興味ある分野の勉強」(3.98、4.40)に対する期待が高い。

4. 入学後の学び

4.1 高校時代の学習意欲と入学後の学習時間

全体の8割以上が、授業業外では全く勉強しないか、過当たりの勉強時間が6時間未満である。そして、高校時代の学習意欲が低かった者(低位群)ほど、短大でも全く勉強をしない者の割合が高い。(表4-1)

表4-1 高校学習意欲と卒業時学習時間

	N	平均(h)	全くしなかった	0-6時間未満	6-11時間未満	11時間以上
全体	6335	3.7	18.3%	65.8%	10.6%	5.4%
低位	1434	3.3	24.5%	60.6%	10.2%	4.7%
中位	2969	3.5	18.0%	67.4%	9.9%	4.6%
高位	1932	4.2	14.0%	67.1%	11.8%	7.1%
大学生	48233	5.4	12.9%	56.2%	17.4%	13.7%

さらに、過当たりの平均勉強時間は、大学生より1.7時間も少ない^{注2)}。1日1時間以上勉強している大学生は3割であるが、短大生は15%と半数であり、勉強をしないといわれる日本の大学生の中でも短大生はより勉強していないといえる。

また、高校時代の勉強時間(表3-3)と比較すると、全体の平均勉強時間は0.3時間減少しているが、高校時の学習意欲低位群の勉強時間は0.4時間増え、全く勉強しない者の割合も8%ほど低下していることがわかる。高校時は学習意欲が持てなかった者の中には、短大入学後にその意欲が高まった者が存在している。

短期大学の学生調査2

しかしながら、逆に中位群や低位群の勉強時間は高校時よりも減少している。このことは、高校時代に学習に対する姿勢がある程度できてきている学生に対して、その学習意欲を保持、さらに喚起させることが、現行の短期大学の教育課程では十分にできていないことを示唆している。この中間・上位層の学生に対する学習支援の充実は、短期大学教育にとって低位層をある水準まで引き上げる試みと並ぶ大きな課題である。

さらに、高校時代の学習経験が短大入学後の学習時間に大きく影響しているの
で、学習習慣の確立を目指した「高校－短大の接続教育」の必要性が高まっている。

4.2 学習への取組み

全体的に、授業に係る取組み(a,d,e,j,l)はきちんとするが、そこで発言したり(b,c)、授業外に自分で主体的に学習する取組み(f,g,h,i,k)には消極的である。

表4-2 高校学習意欲と短大学習への取組み

	低位			中位			高位		
	1年次	卒業時	差	1年次	卒業時	差	1年次	卒業時	差
	2094	1497		3737	3069		1883	2017	
a: 授業に出席する	4.39	4.16	-0.23	4.60	4.31	-0.29	4.74	4.47	-0.27
d: ノートの取り方を工夫する	3.13	3.06	-0.07	3.44	3.33	-0.11	3.70	3.68	-0.02
e: 授業での配布資料・プリントを整理する	3.63	3.38	-0.25	3.88	3.63	-0.25	4.13	3.94	-0.19
j: 授業の課題をきちんと提出する	4.01	3.85	-0.16	4.23	4.02	-0.21	4.42	4.23	-0.19
l: 試験前には勉強をする	3.86	3.69	-0.17	4.15	3.96	-0.19	4.36	4.16	-0.19
合計	19.02	18.14	-0.88	20.31	19.26	-1.05	21.35	20.48	-0.87
b: 授業中、教員の質問に答えたり、意見を述べたりする	2.57	2.67	0.09	2.79	2.84	0.05	3.06	3.15	0.09
c: 授業中以外に教員とコミュニケーションをとる	2.60	2.88	0.28	2.73	3.03	0.31	3.00	3.30	0.33
合計	5.17	5.55	0.37	5.52	5.88	0.36	6.06	6.48	0.42
f: 教科書以外に参考文献などを読む	2.12	2.27	0.15	2.33	2.52	0.19	2.65	2.87	0.22
g: 辞書・電子辞書を活用する	2.47	2.27	-0.20	2.80	2.59	-0.21	3.08	2.91	-0.17
h: 図書館を利用する	2.52	2.70	0.18	2.74	2.89	0.15	3.02	3.23	0.22
i: インターネットを活用する	3.12	3.35	0.23	3.33	3.53	0.20	3.56	3.86	0.29
k: 授業の予習・復習をする	2.24	2.28	0.04	2.55	2.57	0.02	2.83	2.94	0.11
合計	12.47	12.88	0.40	13.76	14.11	0.35	15.13	15.81	0.68

高位群と低位群とでは、「授業の予習・復習をする」「辞書・電子辞書を活用する」「ノートの取り方を工夫する」「教科書以外に参考文献などを読む」で、卒業時に0.6以上の差がある。このことから、高校時代の学習意欲は、短大での2年間を通じた学習への取組みにまで影響していると考えられる。

表4-3 短大教育に対する満足度と学習時間

教育課程	a: 選択できる授業の多様性		b: 豊かな授業や技術を身に付ける授業		c: 専門的知識や技術を身に付ける授業		d: 実践(職業)で役立つ実学性重視の授業		e: 学外体験(実習やインターシップ)の機会		f: わかりやすい授業		g: 授業方法に工夫がある授業		h: 参加意識が持てる授業		i: 私語のない授業	
	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L
	3.61		3.64		3.84		3.73		3.59		3.43		3.40		3.38		2.98	
全くしない	48.5%	14.1%	46.3%	11.5%	57.2%	9.0%	52.8%	11.7%	45.7%	16.3%	38.2%	14.6%	38.4%	16.0%	36.5%	18.1%	22.1%	27.9%
週6h未満	56.1%	10.1%	56.5%	6.8%	66.9%	5.4%	60.1%	7.3%	53.2%	12.0%	44.6%	10.9%	42.2%	11.5%	41.2%	12.2%	23.4%	25.4%
週6h以上	58.2%	9.1%	59.6%	8.3%	69.1%	5.4%	61.7%	7.6%	53.0%	14.1%	50.5%	8.2%	48.4%	9.3%	48.9%	11.4%	27.5%	22.7%

学生支援	j: 科目履修に関する助言や指導		k: 就職や編入学など進路選択の励まし		l: 学習スキルを向上するための手助け		m: 教員の専門分野に触れる機会		n: 精神的なケアや励まし		o: 授業以外で教員と交流する機会		p: 就職・進路支援の体制		q: 進路や悩みなどを気軽に相談できる体制		r: 部活・サークル・イベントなど学生同士の交流の機会		s: 図書館や情報設備	
	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L
	3.56		3.58		3.45		3.50		3.30		3.37		3.76		3.55		3.17		3.59	
全くしない	44.5%	13.9%	47.7%	15.9%	37.7%	16.2%	41.1%	14.6%	35.0%	22.7%	37.6%	20.3%	56.5%	14.1%	47.5%	18.1%	30.8%	27.7%	44.9%	15.6%
週6h未満	52.1%	8.0%	53.3%	11.1%	44.1%	10.5%	46.9%	9.4%	38.2%	16.1%	41.1%	15.1%	63.3%	8.8%	51.9%	13.8%	34.9%	21.7%	52.8%	9.4%
週6h以上	55.3%	8.1%	54.4%	12.3%	52.3%	9.3%	54.4%	8.4%	42.2%	16.6%	46.4%	12.7%	64.2%	10.0%	52.7%	15.2%	37.2%	22.7%	57.2%	10.1%

また、授業に係る取組みは、1年次より卒業時の方が消極的になり、授業中の発言や授業外の主体的な学習への取組みは、積極的になるという傾向がみられる。

4.3 短大教育に対する満足度

短大教育に対する満足度は、教育課程では「専門的知識や技術を身につける授業」(3.84)「実践(職業)で役立つ実学性重視の授業」(3.73)、学生支援では「就職・進路支援の体制」(3.76)「就職や編入学など

進路選択の励まし」(3.58)など、職業を意識した授業や支援に対する満足度が高い。

しかし、「私語のない授業」に対する評価は、全項目唯一の2点台で、学生の不満の大きい項目である。また、「部活・サークル・イベントなど学生同士の交流の機会」に対する満足度も低い。

教育課程や学生支援に対する満足度は、専攻分野や短期大学による差が大きい、ここでは、授業以外の学習時間による差異に着目した。高い満足度(H: 5件評定で4か5を選択)を示した者の割合は、すべての項目で学習時間の長い者(週6時間以上)が高く、全く勉強しない者が低かった。短大時代に学習習慣のなかった者は、授業の内容、教員の対応や指導、学校の支援体制への満足度が低い。短大で提供される学習資源に対する満足度が低いから学習の意欲が湧かないのか、学習意欲が低いために短大の学習資源を否定する傾向があるのか、この結果からはそれを読み取ることはできないが、授業以外で勉強しない学生の満足度は低いという事実に対する、短大の対応として何が考えられるだろうか。全く勉強をしない学生を放置することは、短大教育に対する内部からの評価(学生や教員の評価)のみならず、外部による評価(高校関係者・就職関係者等を含む地域ステークホルダー)の低下に繋がる可能性が高い。やはり、勉強しなかった学生が勉強しようと思うようになる仕掛けが幾重にも必要なのであろう。

4.4 身につけた能力(アカデミックスキルとジェネリックスキル)

アカデミックスキルは、どの能力についても1年次よりも卒業時に高まったと自己評価している(表4-4)。中でも「ひとつの問題を深く追求する態度」は、「人文教養」「社会」「家政」「教育」で有意に評価が高まっている。

表4-4 アカデミックスキル(1年次・卒業時比較)

アカデミックスキル		(上段:1年次 下段:卒業時)						
	a: 学問に対する興味関心'	b: 専門的な知識や技能'	c: 幅広い知識や教養'	d: 職業や進路選択への方向づけ'	e: ひとつの問題を深く追求する態度'	f: 多様なものの見方を知って受け入れること'	g: 社会の現実的な問題への関心'	合計
全体	3.68	3.90	3.78	3.74	3.39	3.65	3.72	25.87
	3.76	3.99	3.88	3.86	3.58	3.82	3.83	26.72
人文・教養	3.63	3.73	3.72	3.79	3.42	3.74	3.83	25.87
	3.76	3.81	3.84	3.81	3.64	3.91	3.89	26.65
社会	3.56	3.87	3.77	3.73	3.35	3.63	3.70	25.60
	3.74	3.95	3.80	3.80	3.58	3.75	3.79	26.40
保健	3.58	3.87	3.71	3.70	3.34	3.56	3.60	25.36
	3.72	3.98	3.80	3.77	3.52	3.74	3.66	26.20
家政	3.67	3.87	3.74	3.65	3.33	3.57	3.68	25.50
	3.68	3.93	3.82	3.74	3.55	3.76	3.78	26.27
教育	3.80	4.02	3.88	3.84	3.47	3.73	3.78	26.51
	3.93	4.21	4.05	4.11	3.70	3.96	3.95	27.90
地域総合	3.55	3.82	3.67	3.63	3.31	3.57	3.63	25.18
	3.56	3.81	3.71	3.65	3.43	3.65	3.69	25.51
その他	3.71	3.88	3.77	3.73	3.42	3.66	3.70	25.87
	3.69	3.95	3.83	3.79	3.50	3.73	3.80	26.29

ジェネリックスキルも、1年次よりも卒業時にすべてについて高まったと自己評価している。特に「リーダーシップ」「自分に対する自信」は、他と比較すると高くはないが、1年次から卒業時の伸び率は高い。

アカデミックスキルもジェネリックスキルも「教育」の伸び率が大きく、評価値4以上の項目は「教育」に限られ、卒業時に「専門的な知識や技能(4.21)」「職業や進路選択への方向づけ(4.11)」「幅広い知識や教養(4.05)」「最後までやり抜く力(4.13)」「チームで仕事をする力(4.08)」「自分で考え行動する力(4.00)」がよく身についたと評価している。

表4-5 ジェネリックスキル(1年次・卒業時比較)

アカデミックスキル		(上段:1年次 下段:卒業時)						
	a: 学問に対する興味関心'	b: 専門的な知識や技能'	c: 幅広い知識や教養'	d: 職業や進路選択への方向づけ'	e: ひとつの問題を深く追求する態度'	f: 多様なものの見方を知って受け入れること'	g: 社会の現実的な問題への関心'	合計
全体	3.68	3.90	3.78	3.74	3.39	3.65	3.72	25.87
	3.76	3.99	3.88	3.86	3.58	3.82	3.83	26.72
人文・教養	3.63	3.73	3.72	3.79	3.42	3.74	3.83	25.87
	3.76	3.81	3.84	3.81	3.64	3.91	3.89	26.65
社会	3.56	3.87	3.77	3.73	3.35	3.63	3.70	25.60
	3.74	3.95	3.80	3.80	3.58	3.75	3.79	26.40
保健	3.58	3.87	3.71	3.70	3.34	3.56	3.60	25.36
	3.72	3.98	3.80	3.77	3.52	3.74	3.66	26.20
家政	3.67	3.87	3.74	3.65	3.33	3.57	3.68	25.50
	3.68	3.93	3.82	3.74	3.55	3.76	3.78	26.27
教育	3.80	4.02	3.88	3.84	3.47	3.73	3.78	26.51
	3.93	4.21	4.05	4.11	3.70	3.96	3.95	27.90
地域総合	3.55	3.82	3.67	3.63	3.31	3.57	3.63	25.18
	3.56	3.81	3.71	3.65	3.43	3.65	3.69	25.51
その他	3.71	3.88	3.77	3.73	3.42	3.66	3.70	25.87
	3.69	3.95	3.83	3.79	3.50	3.73	3.80	26.29

5. 短大教育の総合評価

5.1 学習時間別にみた短大教育の総合評価

進路選択における仮定法「もし、あなたが今18歳で、もう1度高校卒業後の進路選択ができるのであれば、あなたはどうしますか」の可能性(5件評価)の質問に対する回答を「短大教育の総合評価」ととらえた(表5-1)。

「短大に行く」、「同じ短大に行く」、「同じ専門分野を選ぶ」、いずれの可能性についても、授業外の学習を全くしなかった者の可能性が最も低かった。「四年制大学に行く」可能性は、週6時間以上学習する者が最も高く、「進学しない」可能性は全く授業外での学習をしない者の可能性が高く2割の学生が進学をしないと回答している。

「同じ短大に行く」についての可能性と2年間の満足度評価項目の関連を見ていくと、すべての評価項目で同じ短大に行く可能性の大きい者の評価値が高かった。その中でも可能性の大きい者と小さい者との間で差が大きかったのは、「良い先生との出会い」「将来に役立つ勉強」の項目で、短大在学中に良い教員に会い、将来の職業に役立つと思える勉強ができた実感できた者の評価が高かったといえる。

表5-1 短大教育の総合評価(在学中の学習時間別)

		A: 短大に行く			a: 同じ短大に行く			b: 別の短大に行く			c: 同じ専門分野を選ぶ		
		平均値	可能性小	可能性大	平均値	可能性小	可能性大	平均値	可能性小	可能性大	平均値	可能性小	可能性大
全体	6335	3.57	22.2%	55.9%	3.32	28.8%	48.7%	2.66	43.9%	27.2%	3.24	29.7%	44.3%
全くしない	18.2%	3.42	26.1%	50.9%	3.13	35.0%	44.0%	2.63	46.3%	28.1%	3.02	36.6%	37.7%
週6h未満	65.7%	3.61	21.1%	57.3%	3.35	27.6%	49.7%	2.68	43.4%	27.1%	3.30	27.7%	46.0%
週6h以上	16.0%	3.58	22.3%	55.6%	3.39	27.0%	50.1%	2.64	43.1%	26.6%	3.23	30.3%	44.8%

B: 四年制大学に行く			C: 専門学校に行く			D: 進学しない		
平均値	可能性小	可能性大	平均値	可能性小	可能性大	平均値	可能性小	可能性大
3.30	32.3%	53.4%	2.48	53.0%	28.0%	1.91	71.9%	16.6%
3.22	35.8%	52.1%	2.43	54.1%	27.9%	2.11	66.0%	22.3%
3.30	31.7%	53.6%	2.50	52.3%	28.0%	1.88	72.4%	15.7%
3.35	31.2%	54.3%	2.45	54.8%	28.0%	1.78	76.2%	13.7%

表5-2 短大教育の総合評価(同じ短大に行く可能性と満足度)

	教育課程						課外活動		学外生活		
	a: 興味ある分野の勉強	b: 将来の職業に役立つ勉強	c: 人としての教養を深めること	d: 良い先生との出会い	e: 新しい友達との出会い	f: 自由な雰囲気	g: ボランティア活動	h: サークル・クラブ・部活動等での活躍	i: アルバイト	j: 趣味等の活動	
a: 同じ短大に行く											
可能性大	4&5	4.19	4.20	4.09	4.05	4.56	4.20	3.18	3.16	3.66	3.85
可能性中	3	3.86	3.85	3.75	3.63	4.23	3.82	2.97	2.95	3.47	3.63
可能性小	1&2	3.62	3.60	3.56	3.33	4.10	3.63	2.78	2.79	3.52	3.62
差(大一小)		0.58	0.60	0.54	0.73	0.46	0.57	0.39	0.38	0.14	0.23

6. 自由記述から

6.1 授業や学習について

短大では、専門的知識を身につけることができる授業や実習が必要とされており、授業に対して熱心に学生と関わろうとする教員の姿勢が高く評価されている。

しかし、授業の準備不足や、指導の方法に対して不満を抱いている学生がおり、優しさや親しみやすさだけではなく、授業中の厳しい対応も教員には求められている。

「代表的なプラス意見」

- ・先生がとても熱心で、とても親切に教えてくれるので、授業がわかりやすい。
- ・専門的な分野を学ぶことができる。
- ・実習や実技などを多く経験することができ、就職する上で役に立つ。

「代表的なマイナス意見」

- ・先生が注意をしないので、授業中の私語が目立って集中できない。
- ・声が小さかったり、黒板の字が読みにくいいため、授業がわかりにくい。
- ・先生が時間を守らず、授業の開始時間や終了時間が遅れるのが困る。

6.2 教員への声

優しく話やすく、何でも相談に乗ってくれる教員、さらに、授業面のみならず、生活面全般、就職支援、編入など、あらゆる面でサポートしてくれる教員の評価が高く、高校時代と同じような身近に感じられる教員を求めている。

逆に、学生とのコミュニケーションの少ない教員、学生を見下したり、不平等な態度を示す教員の評価は低く、短大生活に期待して入学してきた学生たちの内面をよく理解していない教員に対する彼らの目は厳しい。

「代表的なプラス評価」

- ・先生が生徒と関わる機会が多く、また、関わりやすい環境となっている。
- ・友達のことについて色々あったけど、先生がきちんと対応してくれてすごく良かった。
- ・先生方が編入の相談にのってくれたので、編入する勇気がでた。
- ・就職支援にとっても力を入れてくれている。

「代表的なマイナス評価」

- ・生徒とのコミュニケーションをもっととって欲しいです。
- ・先生が冷たい！
- ・先生によってはたまに見下した話し方をされているみたいで嫌です。
- ・先生も上辺だけって感じの人が多。

7. 考察とまとめ

本稿で述べた学生調査から考察した、短大教育の改善の視点を以下にまとめた。

7.1 短大への円滑な移行を促進するための、高-短連携と導入教育の必要性

- ・自分で選択した専門分野の学びに対する期待を持って短大へ入学するが、高校の学びに対する親和性や達成感が低いために学びに対する基本的な構えや習慣が十分に形成されていない者が、全体の2割以上存在する。
- ・高校の学びに対する親和性は、入学後の学習時間を規定し、2年間の学習課程や獲得能力(自己評価)に大きな影響を与えている。
- ・短大での新たな学びへの円滑な移行を促進するために、基礎学力の伸長と職業意識の育成を目的とした高-短連携と導入教育が必要である。
- ・入学が決まった生徒に対して専門基礎知識や技能に関する講習の受講、入学前の課題提出を課す等、短大での新たな学びに対する期待や意欲を喚起するしかけが必要である。

7.2 学習成果の向上を目指した教育課程の再編成と学習支援の実現

- ・たとえ、短時間(1日1時間程度)であっても授業以外に勉強をする者と、全く勉強しない者とは、獲得能力・教育満足度に大きな差がみられる。特に人文教養では顕著である。
- ・主観的評価である獲得能力・教育満足度は、学習時間と関係しており、学習習慣のある者は、自己評価や達成感が高いと同時に、短大教育に対する満足度も高い。
- ・短大の学習成果の向上には、まず、授業以外に全く勉強しない学生が減るような教育課程の編成と学習支援の実現が必要である。
- ・それと同時に、意欲が高い学生に対してその能力を発揮する機会を今以上に提供して、短期大学での成長を実感させ、職場や進学先での活躍に繋げる取り組みも課題である。

7.3 授業内・授業外双方における教員の教育力の重要性

- ・アルバイトと学習時間に負の相関は見られないものの、週当たりのアルバイト時間は学習時間の3倍を超えている。収入は生活費や学費に充てられることも多く、アルバイトなしでは学生生活が成り立たない学生も存在するので、学生のアルバイトの実態をよく知り、そのあり方や指導支援の方法を開発する必要がある。
- ・授業外での学習時間を確保すると同時に、学校での拘束時間が長い短大では、授業での学びの密度や質を高めていくことが求められる。
- ・短大の総合評価は「職業に繋がる教育」とそれを担当する「教員の教育力」に強く規定される。
- ・資格取得系の学科に限らず、すべての学科で、職業を意識した教育課程の編成と実践の一層の工夫が求められる。
- ・自由記述には、教員についての内容が数多く見られた。優しい・親しみやすいなど、全体的には教員に対するプラスの評価が多いが、一方、授業中の私語に対する対応や、突然授業を休講する・授業開始時間に遅刻する等、教員としての基本的姿勢に対する不満も一部見られた。特に私語に対する厳しい姿勢を求める要望が多く、優しく親切だけではなく、厳しさを求めた教員を求めている。「良い教員との出会い」が、短期大学教育の評価を高める。「良い教員」とは具体的にどのような教員なのか。その共通性を探ることで教育能力を高めていく、短大教員のためのFD開発が求められている。

参考文献

- 安部恵美子他2008『短期大学卒業者のキャリア形成に関するファースト・ステージ論的研究』
平成16～18年度科学研究費補助金(基盤研究(B))(1) 課題番号16330170) 研究成果報告書
- 安部恵美子、小嶋栄子2010「『在学生調査』からみた長崎短期大学の教育 ～全国調査との比較から見えた本学教育の傾向と対策～」『研究紀要』第22号、長崎短期大学
- 安部恵美子、小嶋栄子2011「短期大学の学生調査 ―キャリア教育・職業教育の探究1―」
『研究紀要』第23号、長崎短期大学

【本稿は、『短期大学教育とステークホルダーに関する総合的研究 中間報告書』(科学研究費補助金基盤B No.21330195 平成21～24年度)の一部に加筆修正したものである。】

注1：香蘭女子短期大学・佐賀女子短期大学・精華女子短期大学・東海大学福岡短期大学・長崎女子短期大学・長崎短期大学・西九州大学短期大学部・福岡工業大学短期大学部・福岡女子短期大学

注2：「全国大学生調査」「全国大学生調査第一次報告書」東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター、2008より